

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します
e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜北海道熊研究会 会報＞ 第 89 号 2019 年 7 月 14 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の 1～88 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜野幌森林公園に出て来た熊＞

公園内に熊が 79 年振りに(後述)現れたが、熊が出て来た原因は、「強烈な爆発音がする銃器での殺戮を中止」した為であり、そして、出て来た目的は、「若熊が行動圏を確立する為に検証に出て来たのである」。若熊とは、今年母から自立した満 1 歳代、ないし満 2 歳代の個体の呼称である。

この個体が公園内に出て来た原因について、酪農学園大学の佐藤喜和教授は、北海道新聞 2019 年 6 月 12 日記事に、「おいしい食べ物を求めて来ているだけ」と、言っているが、全くの見当違いである。また、道職員で熊研究者の間野勉氏は(北海道新聞 2019 年 7 月 11 日朝刊)に、熊がこの地所に出て来た原因は、「札幌周辺のクマは増えて密度が増し、平地の森林に侵入する圧力が強まっている」ためと書いているが、これも、私からみれば、検証不足で間違いである。繰り返すが、熊の行動には、必ず「目的・理由」があるが、今回出て来た若熊の目的原因は、「強烈な爆発音がする銃器での殺戮を中止」した為に、前記目的の検証に出て来たのである。

＜この若熊の年齢は、満 1 歳代と思うが、満 2 歳代での可能性もある＞

この若熊の年齢であるが、北海道新聞 2019 年 6 月 12 日記事に、体長(鼻先から尾の付け根「肛門迄」、身体を伸ばした状態での長さ)が、1 ㍓とある。1 ㍓と言う大きさからのみ、年齢を推察すれば、満 1 歳代と言う事になるが、公表されている画像で、その個体が排泄した糞の口径を見ると、ソーセージ状の糞で、付記されて居る物差し

で計ると、口径が 3.5 ㍍程あるものもあり、満 1 歳代にしては口径が少し太いものがある。とすれば、満 2 歳代の可能性もある。いずれにしても、若熊が人を襲った事例は、私が熊の研究を始めた 1970 年以降に限って見ても、一例も無い。若熊は人を襲うと言う知恵が未発達なのだと、私は看取している。

<この熊が出て来た経路>

出て来た経路は、本能的に人と遭遇しない地所を通り主に夜間に、「有明・仁別方面から輪厚方面を経て、西の里の野幌原始林を経て、野幌森林公園に至った」と私は見る。

<熊の生息地としての「野幌森林公園」>

私は 1970 年から 30 年間、この地域で、自然環境調査を行っていたので、現地は精通している。この地域は熊の生息地としては不適である。理由は、繁殖と言う観点から、熊が自由に日夜、人を気にせずに、繁殖の為に、他の熊が居る場所に、行き来し得る交通路が無いからである。

札幌市の東端にある野幌森林公園は（面積は東西 4km、南北 5km。標高は 10m から 97 m で、全体として起伏ある地形で、針広の森林があり、草類も多様で、沢地もあり、人工の溜池も数カ所ある）。熊が冬籠もり穴を造れる斜面もある。そして、熊が採食する草類の中で最も熊が好んで採食する座禅草 *Symplocarpus* spp. も各所にあり、熊が動物性の主たる採食物として好む蟻類も各所に営巣しており、往時から熊の生息適地であり、現在でも 2 頭程の熊が通年生息し得る環境で有る。しかし、前記理由から、現状では、熊の生息地としては不適地である。

この若熊の今後の動向だが、本能的に己の行動圏を探索して居る若熊であり、野幌森林公園は広域で熊が好む樹林地や沢も広域に有り熊が自活し得る植物性の餌や蟻は居るから土着する可能性が強いと私は見る。

<早期に檻罠で捕獲し、生息適地に放すべきである>

早期に軽量の簡易な檻罠に造り、餌(木綿「無害である」の布を刻んだ物に、蜂蜜を浸したし、誘餌とする)を入れて、捕獲し(この場合、麻酔は絶対に使用し為ない事、いじめない事)、罠に覆いをして外界が見えないようにして、自動車で定山溪の奥山である「豊平川の最上流部地域」に放逐するのが最良だと私は考えている。檻を開ける場合は、ロープで檻の戸を、上に揚げる様に工夫し、このロープを自動車で引っ張って戸を開ける工夫をすれば、放逐時の熊を恐れる事も解消されよう。

<顛末>

北海道新聞 7 月 11 日夕刊によると、農作物被害予防の為に、檻罠で捕獲を決めたと言う。結局は殺すのであろう。愚かな行為である。

< 江別管内に熊が出没した最後の記録は >

昭和 16 年 3 月 20 日頃に、若熊 1 頭が原始林に現われたとの知らせで、厚別字旭町に在住していた宮久保重喜氏(当時 51 才)と藤沢音吉氏(当時 37 才)の 2 人がこの熊を追跡し、3 日程後に西 4 号線の沢で捕殺したと言うものである。「この沢は、西 4 号道路と国道 274 号間にある沢で、湿地があり、熊が好んで食べる座禅草がある事から、熊がよく来たもので、開拓当初から「熊の沢」と通称し、現在その下流部には「熊の沢」の名称が付されている。「白石歴史ものがたり、p.111」に、この熊の出没年を昭和 19 年と記してあるが、音吉氏と親交のあった藤沢秀雄氏(大正 4 年 9 月生)から門崎が聞き込みした結果、昭和 16 年(1941 年)の誤りであることが判明した。このように、江別・野幌一帯もかつては熊の棲場であった。(了)